

## 第七章 浮舟の物語 浮舟、匂宮にも逢わず、母へ告別の和歌を詠み残す

[第一段 内舎人、薫の伝言を右近に伝える]

殿よりは、かのありし返り事をだにのたまはで、日ごろ経ぬ(殿からは先日の返却申した手紙に付いて何の御返事もないまま数日が過ぎました)。\*この脅しし内舎人といふ者ぞ来たる(この山荘警備責任者の、先に右近の話で姫を怖がらせ申した内舎人という者が遣って来ました)。げに、いと荒々しく(確かにとても荒々しく)、ふつつかなるさましたる翁の(無骨な風体の老人で)、声かれ(声はしわがれて)、さすがに\*けしきある(それにしても不気味な口調で)、\*「この脅しし」は注に<右近の話で浮舟を恐がらせた、の意。>とある。ということは、やはりこの「内舎人」は大將からこの山荘の警備を仰せ付かった責任者、でありそうだ。ただ、右近の話でも「この内舎人といふ者」(六章七段)という言い方になっていて、その直前に何らかの話題になっていた者を指しているようでもあり、しかし、それらしい話題は書かれておらず、人物の特定には至らなかった。その限りでは、この「内舎人」は正体不明の人物であり、右近も「脅し」たかもしれないが、右近はそれ以前にその人物の存在やその来訪を<恐ろしいもの>として誰かから知らされていた、ということのようでもあり、この「この脅しし」は<右近が>ではなく、その<誰かが>「脅し」た、ということとも取れそうだ。が、この「この」は<この山荘警備の>という意味で、「脅しし」が<先に右近が怖がらせた>という意味だとすれば話は分かり易いし、その筋で破綻が無いのなら異論は無い。ただ、もう少し分かり易い書き方が出来ないのかと残念に思うだけだ。\*「けしきある」は「けしきあり」の連体形で下に<さまにて>などが省かれた言い方、のようだ。で、この「けしきあり」は「脅しし」を受けた<如何にも恐ろしい>という形容句のようで、下の内舎人の台詞は漢文調というか古風というか、何とも堅苦しい言い回しのように私にも思えるが、やはりその話の内容そのものが恐ろしく、右近はその口調に非常に凄みを感じたらしく、下文にこの内舎人の話を「梟の鳴かむよりも、いともの恐ろし」と結んである。ところで、「けしきあり」は古語辞典に<趣きがある。おもしろい。>という語用の他に<怪しい。>の語用が示され、その用例として源氏物語・夕顔巻四章四段の「松の響き、木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、「梟」はこれにやとおぼゆ」と夕顔が急死した古院の不気味さを語る箇所が示されている。そして、その「梟はこれにや」の「梟」の出典参照には「梟鳴松桂枝 狐藏蘭菊叢」(白氏文集一四 凶宅詩)が示されている。「凶宅」全文の掲載は日本語サイトにはあまり見当たらなかったが、分かり易い訳文が「吉澤昌江のページ」サイトの「凶宅(2004/11/06)一日記帳」ページにあったので、参照させてもらった。と、「凶宅詩」は五言二十二行四十四句からなり、漢詩調子の二行四句で詠われていて、「梟鳴松桂枝 狐藏蘭菊叢(梟が松桂の枝で鳴いているし、狐が蘭菊の草むらにかくれている)」はその三行目の五句六句部分らしい。で、この部分は廢屋の描写で、夕顔巻でも邸の荒廢ぶりに引かれているようだ。が、「凶宅詩」自体の論旨は結びの四行(19行~22行、37句~44句)で、同じ場所でも長く栄える国もあれば直ぐに滅ぶ国もあるので、人家も国家もその吉凶は場所ではなく人の管理次第だ、と論じているらしい。だから、夕顔巻の「梟」は「凶宅詩」の教諭を引いたのではなく、その中の荒ら家の描写の情趣だけを借りたもので、此処でも同様の引用らしく、この「けしきある」の「けしき」は<「凶宅詩」にある「梟の居る家」の不気味さ>という意味の「例の景色」くらいの言い方であるがゆえの、正にこのように「ある」と指し示している連体形語用、という語感なのかもしれない。しかし、この「さすがにけしきある」という言い方だけで、「凶宅詩」の引用を心得るのは、当時の読者でも無理だろう。私は下文に「梟の鳴かむよりも、いともの恐ろし」とあるので気付いたが(この点に付いて、注釈が無い不親切には疑問と不満を感じるが、無料のウェブ公開文だし、典拠が示されても結局は調べ直したかとも思うが、此処まで長いノートはせず済んだだろう)、読者が「さすがにけしきある」と読ん

だ時点で「凶宅詩」の引用を心得られるような「内舎人」に付いての何らかの紹介本文が上文の何処かにあって、それが脱稿していると思われるのではない。

「女房に、ものとり申さむ(女房にお話し申したい)」

と言はせられたらば(と取り次がせたので)、\*右近しも会ひたり(怖がらせた当の右近が応対に出ました)。\*「右近しも」の「しも」は<他ならぬ「この脅しし」者であるところの>という限定意のようだ。

「殿に召しはべりしかば(殿に呼び出されましたので)、今朝参りはべりて(今朝三条宮邸に参上申して)、ただ今なむ(たった今)、まかり帰りはんべりつる(帰って来申した)。雑事ども仰せられつるついでに(他の諸事を仰せ付けになったことに次いで)、かくておはしますほどに(姫君が此処にいらっしゃる内は)、夜中、暁のことも(夜中も早朝も)、なにがしらかくてさぶらふ(私どもがこうして詰めていれば安心だ)、と思ほして(とお考えになって)、宿直人わざとさしたてまつらせたまふこともなきを(殿居の侍を特には差し向け申しなさらなかったが)、このころ聞こしめせば(最近お聞きになったところでは)、

女房の御もとに、知らぬ所の人通ふやうになむ聞こし召すことある(女房の所に他家の男が通っているようだとお聞きになったらしい)。『たいだいしきことなり(不届きだ)。宿直にさぶらふ者どもは(宿直当番の物たちは)、その案内聞きたらむ(その事を知っているだろう)。知らでは、いかがさぶらふべき(知らないでは門番の役に立たない)』

と問はせたまひつるに(と詰問なさいましたが)、承らぬことなれば(私は与り知らぬことなので)、

『なにがしは身の病重くはべりて(私自身は体調が悪く)、宿直仕うまつることは、月ごろおこたりてはべれば(宿直は何ヶ月も致しておりませんので)、案内もえ知りはんべらず(直接は事情を存じ申しませんが)、さるべき男どもは(当番の者たちは)、解怠なく催しさぶらはせはべるを(油断無く警護させておりますので)、さのごとき非常のことのさぶらはむをば(そのような異常がございましたなら)、いかでか承らぬやうははべらむ(どうして承知しないで居りましょう)』

となむ申させはべりつる(とのおうにお答え申しました)。用意してさぶらへ(用心為されよ)。便なきこともあらば(不始末があれば)、重く勘当せしめたまふべきよしなむ(厳重に処罰なさる旨を)、仰せ言はべりつれば(仰せ付けなされたので)、いかなる仰せ言にかと(如何するお心算なのかと)、恐れ申しはんべる(畏れております)」

と言ふを聞くに(と内舎人が言うのを聞くと右近は)、\*梟の鳴かむよりも、いともの恐ろし(梟が鳴く不吉さよりも、ずっと恐ろしく聞こえます)。\*「梟(ふくろふ)」は猛禽類だから、粗暴だ・強い・怖いという印象はあるのだろう。ただ、梟の方にしても人家は避けるので、「鳴かむ」と言っても実際に鳴き声を邸内で聞くわけはなく、この言い方は白居易の「凶宅」という漢詩にある荒ら家の不吉さや不気味さを引いているであろうことは、先の「けしきある」の項のノートで見た。

いらへもやらで(右近は答えもせず、内心で)、

「さりや(やはりそうか)。聞こえさせしに違はぬことどもを聞こしめせ(私が姫にお聞かせ申した通りの三角関係の事情を殿は聞き知りなさって)、もののけしき御覧じたるなめり(兵部卿に不審な御動向がありそうな気配に警戒なさっているらしい)。御消息もはべらぬよ(これでは御手紙も無いはずだ)」

と嘆く(と嘆きます)。乳母は、ほのうち聞きて(乳母は内舎人の話を遠くで聞いて)、

「いとうれしく仰せられたり(殿は姫を大事に思って、嬉しいことに用心して警護の強化を仰せになったのだ)。盗人多かんなるわたり(盗人が多い物騒なこのあたりなのに)、宿直人も初めのやうにもあらず(宿直人も当初ほど多く居ませんからね)。皆、身の代はりぞと言ひつつ(皆代役を立てて)、あやしき下衆をのみ参らすれば(不案内な下侍ばかり遣っていたので)、\*夜行をだにえせぬに(夜回りさえろくにしていないのだから)」と喜ぶ(と喜びます)。 \*「夜行」は「やぎやう」と読みがある。百鬼夜行の妖怪の徘徊のことでもあり、それを警戒する見回りでもあるらしい。

[第二段 浮舟、死を決意して、文を処分す]

君は(姫君は)、「\*げに(殿がそう仰ったのなら、確かに)、ただ今いと悪くなりぬべき身なめり(これで本当に悪くなってしまった私の立場のようだ)」と思すに(とお思いになるところに)、宮よりは(兵部卿からは)、 \*「げに」は、右近から殿が内舎人に警備を嚴重にするようにと指示があったことの報告を受けて、また間違いがあれば厳罰に処すとの意向も聞き知って、いよいよ進退窮まった、と観念したことを示す了解らしい。

「いかに、いかに(はっきりと答えてくれ)」

と、\*苔の乱るるわりなさをのたまふ(と返事を待ち侘びる辛さを訴え為さるのが)、いとわづらはしくてなむ(とても煩わしく思われます)。 \*「こけのみだるる」は注に<明融臨模本、朱合点、付箋。『君に逢はむその日をいつと松の木の苔の乱れて物をこそ思へ』(新勅撰集恋二、七三四、読人しらず)。『異本紫明抄』は「逢ふことをいつかその日と松の木の苔の乱れて恋ふるこのころ」(古今六帖六、こけ)を指摘。>とある。「松の木の苔の乱れ」とは、苔が生すには長い静止時間が必要なことから、松に<待つ>を掛けて、長く待たされて思い乱れている、という意味なのだろう。ただ、「苔の乱れ」た絵を思い浮かべると、痺れを切らして心変わりした様のような乱雑さにも思えて、耐える苦しみの語感が損なわれるような気もする。

「とてもかくても(大将と宮のどちらを選んでも)、\*一方一方につけて(それぞれの方にとって)、いとうたであることは出で来なむ(とても不快なことになるだろう)。わが身一つの亡くなりなむのみこそめやすからめ(私一人が居なくなれば事は穩便に済むのだろう)。 \*「ひとかたひとかたにつけて」は<選ばなかったもう一方が(辛くなる)>ということだろうか。それとも、どちらを選んでも、大将も宮も知り合い同士なので<互いの仲が(悪くなる)>ということだろうか。どちらとも決めかねる変な文だが、どちらの意味にしても、こういう事態になった第一の責任者は匂宮であることは間違いないし、もう既に事態は穩便ではなく、またこの事柄は善悪を超えた好き嫌いなので、姫はどちらかを選ばなければならないが、どちらを選んでも姫に責任はない。が、難しく辛い選択であろうとは推測できる。

\*昔は(昔話には)、懸想する人のありさまの(言い寄る男の優劣を)、いづれとなきに思ひわづらひてだにこそ(決められないことを思い患って)、身を投ぐるためしもありけれ(身を投げる例もあったのだから)、ながらへば(生き永らえば)、かならず憂きこと見えぬべき身の(必ず嫌な目に遭ってしまうこの身が)、亡くならむは(亡くなることに)、なにか惜しかるべき(何の惜しい事がある)。 \*「むかしは」は注に<『万葉集』の真間の手児奈、うない処女、桜児・縵児の説話。>とある。「昔話には」という言い方と取って置く。ただ、さらっと注された<真間の手児奈、うない処女、桜児・縵児>が何なのかさっぱり分からないので、少し調べる。「真間手児奈(ままのてこな)」は大辞泉に<《「ままのてこな」とも》下総(しもうさ)国葛飾(かつしか)(千葉県市川市真間)に住んでいたという伝説上の女性。万葉集の山部赤人・高橋虫麻呂の歌によると、多くの男性の求婚にたえられず、真間の海に入水自殺したという>とある。詳しいウェブページも多くあるようだが、此处では「多くの男性の求婚にたえられず、真間の海に入水自殺した」という事を要点に考えたい。「うない処女(うないをとめ)」は<古代の妻争い伝説の女主人公。菟原壮子(うないおとこ)と血沼壮子(ちぬおとこ)の二人に求婚され、決めかねて入水したという。>とある。「桜児(さくらこ)」は<「万葉集」にみえる伝説上の女性。ふたりの男性に同時に結婚をもうしこまれたが、求婚者同士があらそう姿をみてかなしみ、林にはいつて首をくくった。ふたりの男性はその死をいたみ、1首ずつ歌をよんだという。>とデジタル版 日本人名大辞典にある。「縵児(かづらこ)」は「ウェブリオ辞書」の「物語要素辞典」の「入水」の項に<『万葉集』巻16 3788~3790歌 三人の男が、縵児(かづらこ)に求婚した。縵児は思い悩んで池のほとりをさまよい、ついに水底に身を沈めた。>とあり、その死を悲しんだ男三人の歌の一つに「耳成の 池し恨めし 我妹子が 来つつ潜かば 水は洵れなむ」(万葉集 16-3788)とあり、大和三山の一つ耳成山(みみなしやま、標高140m)にまつわる伝説とされているらしい。因みに、「桜児」は大和三山のもう一つの畝傍山(うねびやま、標高199m)にまつわる伝説らしい。大和三山のもう一つの天香具山(あまのかぐやま、標高152m)には悲恋の投身伝説は無いようだが、藤原京を囲む三山の内でも最も神聖視されていたらしい。ウィキペディアにある大和三山の航空写真は藤原京を偲ばせて感慨深い。

親もしばしこそ嘆き惑ひたまはめ(母君も暫くは嘆き迷いなさるだろうが)、あまたの子ども扱ひに(大勢居る子供の世話焼きで)、おのづから忘草摘みてむ(自然と忘れるだろう)。ありながらもそこなひ(生きながら道を誤まって)、人笑へなるさまにてさすらへむは(見下げられて彷徨う人生は)、まさるもの思ひなるべし(余計悲しくなるだろう)」

など思ひなる(と考えるようになります)。児めきおほどかに(姫は子供っぽくおっとりとして)、たをたをと見ゆれど(たおやかに見えるが)、\*気高う世のありさまをも知る方すくなくて(体裁を重んじるように男女関係に寛容な世の実情もあまり知らないで)、\*生し立てたる人にしあれば(育った人であったので)、すこし\*おずかるべきことを(少し極端なことを)、思ひ寄るなりけむかし(考え付いてしまったようです)。 \*「気高し」は<気品がある。上品だ。高貴だ。>ということだろうが、「世のありさま(男女の仲)」と言っても、宮も大将も貴人なので、それぞれの情交は情趣ある上品なものだっただろうから、此处で言う「世のありさま」は<男女の情交>というよりは<乱れた三角関係=男女の仲に於いては世間一般に広く許容されるだらしな低俗な人間関係>のことで、その対比で言えば「気高し」は<端然さを尊ぶ姿勢=見栄を張る融通の無さ=体面本位>を言うのだろう。 \*「おほしたつ」は<育つ>。 \*「おずし」は古語辞典に<性格が強く激しい。強情で勝気である。>とあり、「おぞまし」と同じともある。恐ろしいほど極端、くらいの言い方だろうか。

むつかしき\*反故など破りて(姫は不都合な不用になった手紙などを破って)、おどろおどろしく一度にも\*したためず(目立つような一度にでは処分せず)、\*灯台の火に焼き(燭台の火で焼い

たり)、水に投げ入れさせなど(川に投げ捨てさせたりして)、やうやう失ふ(少しづつ無くして行きました)。心知らぬ御達は(事情を知らない女房たちは)、「ものへ渡りたまふべければ(引越し為さるので)、つれづれなる月日を経て(長年の内には)、はかなくし集めたまへる手習などを(意味なく貯まってしまった習字した紙を)、破りたまふなめり(捨てていらっしやるのだらう)」と思ふ(と思います)。 \*「反故(ほぐ)」は<不用になった手紙>とあるが、宮からの手紙のことらしい。 \*「したたむ」は<整理してまとめる>でもあり<整理して処分する>でもあるらしい。 \*「灯台(とうだい)」自体は<油皿を載せる木製の台>らしいが、日用語用では<油皿を含めた室内灯火>を指す。

侍従などぞ(しかし侍従が)、見つくる時は(見つけた時は)、

「など、かくはせさせたまふ(何故こんなことを為さいます)。あはれなる御仲に(愛し合う御仲で)、心とどめて書き交はしたまへる文は(心を込めて書き交わした手紙は)、人にこそ見せさせたまはざらめ(他人にこそ見せないものの)、ものの底に置かせたまひて御覧ずるなむ(何かの箱の底にでも隠し置きなさせて御覧になるというのが)、\*ほどほどにつけては(その時々が思い出されて)、いとあはれにはべる(実に情趣あるものでございます)。さばかりめでたき御紙使ひ(如何にも風情ある御紙使いで)、かたじけなき御言の葉を尽くさせたまへるを(有難い御言葉を尽くしなされた宮の御手紙を)、かくのみ破らせたまふ(そのようにお捨てになるとは)、情けなきこと(悲しいことです)」 \*「ほどほど」は<分相応>で、「ほどほどに」は<どんな身分でもそれなりに>と言っているようにも見える。が、姫が正に私信である自分の思い出の恋文を処分している時に、侍従がどうして<身分>などという一般概念を唐突に話題に持ち出す必要があるのか。というか、そういう会話はこの場では成立しない、という前提で、是を普通の日常語として文意を取ろう、と何故しないのか。それに是は、会話文だから場に即した文意を取らなければならない、と特に注意するほどの混み入った文ではない。いやむしろ、是が混み入っていない文だけに、日頃から古文に多く接する人は、「ほどほどに」が<分相応に>と語用される事があまりにも多いので、此处でも是を<分相応に>と読んで、文意を取った心算になって読み流してしまった、ということなのかもしれない。慣れの恐ろしさ、みたいな。であれば、此处は私の不慣れな律儀さの出番ということになる。と、鬼の首でも取ったようにはしゃいで、前置きが長くなったが、この「ほどほどに」は「ほど、ほど、に」と句点しただけで直ぐ分かる。「ほど」は、その手紙を遣り交わした<その時のこと>だ。

と言ふ(と言います)。

「何か(いいえ)。むつかしく(困ります)。長かるまじき身にこそあめれ(私の寿命は短そうなので)、落ちとどまりて(手紙が残ると)、人の御ためもいとほしからむ(宮様にご迷惑が掛かります)。さかしらにこれを取りおきけるよなど(好い気になって是等の手紙を取り置いていたのだと)、漏り聞きたまはむこそ(宮が聞き知り為さることこそ)、恥づかしけれ(恥づかしい)」

などのたまふ(と姫は仰います)。心細きことを思ひもてゆくには(このように一つ一つこの世と別れる準備をする心細さを思って暮らしていると)、またえ思ひ立つまじきわざなりけり(改まって身投げをする決心が付きかねる姫なのです)。\*親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものをなど(親より先に死ぬ人はとても罪深いものだ)、さすがに(もう自分が死ぬしかないと思ひ詰めてはみるものの)、ほの聞きたることをも思ふ(仏道の教えを少し聞いたことも気に掛かります)。 \*「親をおきて亡くなる人はいと罪深かなるもの」は注に<逆縁となり、恩を受けた子が親の追善供養で

きないため。>とある。親より先に死ぬのは親不孝だ、というのは、苦勞して子育てした親が生き甲斐を失くして悲しむ、という実情をいうもので、理屈が先にあるとは私には思えないが、此処では<仏道の教え>として「ほの聞きたる」に掛かる、という構文らしい。

[第三段 三月二十日過ぎ、浮舟、匂宮を思い泣く]

二十日あまりにもなりぬ(三月の二十日過ぎになりました)。\*かの家主(兵部卿宮が手配なさった姫を隠す家の家主は)、二十八日に下るべし(二十八日に任地へ下る予定です)。 \*「かの家主、二十八日に下るべし」は「わが御乳母の、遠き受領の妻にて下る家、下つ方にあるを、～(中略)～、この月の晦日方に、下るべければ、やがてその日渡さむ、と思し構ふ」(五章三段)を受けた文で、「いへあるじ」は宮の乳母らしい。因みに、「大将殿は、卯月の十日となむ定めたまへりける」(五章四段)とある。

宮は(兵部卿宮は)、「その夜かならず迎へむ(その夜に必ず迎えに行きます)。下人などに(侍たちに)、よくけしき見ゆまじき心づかひしたまへ(よく事情を悟られぬように用心なさい)。こなたさまよりは、ゆめにも聞こえあるまじ(此方からは決して洩れません)。疑ひたまふな(安心なさい)」などのたまふ(と御手紙で仰います)。

「さて(兵部卿宮がそのように)、あるまじきさまにておはしたらむに(無理を押しつけて迎えにいらっしやても)、今一度ものをもえ聞こえず(もう一切お話し申し上げず)、おぼつかなくて返したてまつらむことよ(お会いせずにお帰り頂くことになる)。また、時の間にも(例え一瞬でも)、いかでかここには寄せたてまつらむとする(どうしてこの部屋にお近付き頂けよう)。かひなく怨みて帰たまはむ(むなく嘆いてお帰りになるだろう)」さまなどを思ひやるに(宮の様子などを思い遣ると)、例の(あの船宿で遊んだ)、面影離れず(宮の面影がが頭を離れず)、堪へず悲しくて(いつまでも悲しく)、この御文を顔におし当てて、しばしはつつめども(この御手紙を顔に押し当てて暫くは堪えていたが)、いとみじく泣きたまふ(姫は声を上げて大泣きなさいます)。

右近(右近は)、「あが君(姫様)、かかる御けしき(そうしていらっしやっては)、つひに人見たてまつりつべし(女房たちが気付き申してしまいます)。やうやう、あやしなど思ふ人はべるべかめり(次第に変に思う者も出て来ております)。かうかかづらひ思ほさで(そう御心配なさらずに)、\*さるべきさまに聞こえさせたまひてよ(了解したとお返事なさいませ)。右近はべらば(私が居る以上は)、おほけなきこともたばかり出だしはべらば(とんでもない嘘を吐いてでも取り成しますから)。かばかり小さき御身一つは(姫君の小さな御身体一つくらい)、空より率てたてまつらせ\*たまひなむ(宮様は空からお連れ申しなさるでしょう)」と言ふ(と言います)。 \*「さるべきさま」は<宮の御指示通り→同意した>。 \*「たまひなむ」の「たまふ」は四段活用の尊敬語なので主語は兵部卿だ。

とばかりためらひて(すると姫は泣き止んで)、

「かくのみ言ふこそ(私が宮に従えば良いと右近が言うのが)、いと心憂けれ(情けない)。さもありぬべきこと(そうしてはいけない)、と思ひかけばこそあらめ(と思うからこそ悲しいのに)。あるまじきこと(私が宮に従うのは、不届きなこと)、と皆思ひとるに(と皆が思う事なのに)、わりなく(無理を言って)、かくのみ頼みたるやうにのたまへば(このように私の了解ばかりを求め

ていらっしやると)、いかなることをし出でたまはむとするにかなど(一体何を仕出かすお心算なのかと)、思ふにつけて(案じられて)、身のいと心憂きなり(私は本当に辛い立場になる)」

とて(とあって)、返り事も聞こえたまはずなりぬ(宮へは御返事も為さませんでした)。

#### [第四段 匂宮、宇治へ行く]

宮(兵部卿宮は)、「かくのみ(日も迫っていると言うのに、このままで)、なほ受け引くけしきもなく(依然として姫が承知した確認も取れず)、返り事さへ絶え絶えになるは(返事の手紙さえないのは)、かの人(大将が)、あるべきさまに言ひしたためて(姫に事の善悪を言い含めて)、すこし心やすかるべき方に思ひ定まりぬるなめり(姫も隠れ家よりは少し心落ち着く安定した形の部屋住みの方に気持が定まったようだ)」ことわりと思すものから(宮も御自分の無謀さに自覚はあり、それは尤もとは思ふものの)、いと口惜しくねたく(実に悔しく残念で)、

「さりとも、我をばあはれと思ひたりしものを(それでも姫は私を恋しく思っていたものを)。あひ見ぬとだえに(会わないで居る内に)、人びとの言ひ知らする方に寄るならむかし(女房たちが言い聞かせて大将に傾いたのだろう)」

など眺めたまふに(などと思ひ沈みなさって)、\*行く方しらず(どうにも気の晴らしようもなく、それはまるで古今集歌の「行く方もなし」のように遣る瀬無く)、むなしき空に満ちぬる心地したまへば(しかし古今集歌とは違って「むなしき空」となる失恋には我慢できなさらず)、例の(まとも無理を押して)、いみじく思し立ちておはしましぬ(大変なご決意をなさって宇治へお出向きになりました)。 \*「ゆくかたしらず、むなしきそらにみちぬるこち」は注に<明融臨模本、朱合点・付箋。『源氏積』は「わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行く方もなし」(古今集恋一、四八八、読人しらず)を指摘。>とある。この引歌は以前にも引かれていて、ざっと<失恋の空しさ>と解していたかと思う。大意はそれで良いのだろうが、此处では「むなしき空に満ちぬる心地」とあって、その詠み方自体を引いているので、少し詳しく見てみる。と、古今集歌は「わが恋はむなしき空に満ちぬらし」とあって、「らし」の事態認識推量が改めて目につく。つまり、自発意思ではなく受動認識を示す助動詞「らし」の語用は、この破局が<フツたのではなく、フラれた>ことを示していて、だから自分にはまだ未練が有るから「思ひやれども行く方もなし(何とかしたいが、どうしようもない)」という情けなさを、「むなしき空=虚空」だから「行く方もなし(方向概念もない)」という理屈で洒落て笑い飛ばそう、という趣きの歌のようだ。だが、此处では「満ちぬる心地」なのであって「満ちぬらし」と達観してはいないので、この「心地」は<このままではフラれそうだが、それは嫌だ>というところなのだろう。

\*葦垣の方を見るに(従者である側近の時方が、葦藁編みの垣根から寝殿の様子を覗き見ると)、例ならず(いつもとは違って)、 \*「あしがきのかたをみるに」は注に<匂宮の従者。後文により時方と知られる。>とある。ということは、上文の「例の」には<例によって時方を従えて>という意味が含まれている、のだろうか。何れにしても、此处の主語が<時方>と分かるなら、それを此处で伏せる意味は無く、単に作文の至らなさとして、言い換え文ではこの主語を明示補語して置く。

「あれは、誰そ(其処に居るのは誰だ)」

と言ふ声々(という警護の侍たちが言う声は)、\*いざとげなり(嚴重警戒の様子です)。立ち退きて(時方は垣根の前から退いて)、\*心知りの男を入れたれば(顔の知られた文遣いを侍所に挨拶させると)、それをさへ問ふ(その者にまで用件を問い詰めます)。前々のけはひにも似ず(以前とは様子が違います)。わづらはしくて(遣いは困って)、 \*「いざとし」は、古語辞典に「寝聡し」と漢字表記があり<目が覚め易い。目ざとい。>と語用例がある。 \*「心知りの男」は、警護の者たちに<顔を知られた男=良く出入りしている文遣い>なのだろう。

「京よりとみの御文あるなり(京から急用の御手紙です)」

と言ふ(と言います)。右近は徒者の名を呼びて会ひたり(右近は遣いの者の名を呼んで、警護の者に怪しい者ではないからと使者を通させて、会いました)。いとわづらはしく(使者から宮の御来訪を聞き知った右近は、実に困って)、いとどおぼゆ(いよいよ対処に窮します)。

「さらに、今宵は不用なり(絶対に今夜の御面会は無理です)。いみじくかたじけなきこと(まことに恐れ多い事ながら、このままお帰り下さい)」

と言はせたり(と使者に伝言させます)。宮(兵部卿は)、「など、かくもて離るらむ(どうして私をそう遠ざけるのか)」と思すに(とお思いになって)、わりなくて(引き下がれず)、

「まづ、時方入りて、侍従に会ひて(では先に時方が家に入って侍従に会い)、さるべきさまにたばかれ(私が姫に会えるように取り計らえ)」

とて遣はず(と言って行かせます)。かどかどしき人にて(時方は如才ないので)、とかく言ひ構へて(恋仲の侍従に折り入った話があるからと警護の侍に賄賂を捻って)、訪ねて会ひたり(通してもらって会いました)。

「いかなるにかあらむ(どうも大変です)。かの殿ののたまはすることありとて(大将殿が警備の嚴重をお命じになったからと)、宿直にある者どもの(門番たちが)、さかしがりだちたるころにて(目を光らせていて)、いとわりなきなり(困ったことです)。御前にも(姫君に於かれても)、ものをのみいみじく思しためるは(ひどく思い詰めていらっしゃるらしいのは)、かかる御ことのかたじけなきを(こうした宮様のご訪問の有難さを)、思し乱るるにこそ(思い悩んでいらっしゃってのこと)、と心苦しくなむ見たてまつる(とお気の毒に押し申しています)。

さらに(が、それでも)、今宵は(今夜は無理でございます)。人けしき見はべりなば(他の者が事情を知りましたら)、なかなかいと悪しかりなむ(却って不都合になりましょう)。やがて(このままで)、さも御心づかひせさせたまひつべからむ夜(姫を連れ出さなさろうと宮様がお考えの当日の夜に)、ここにも人知れず思ひ構へてなむ(此方でも秘密裏に準備した上で)、聞こえさすべかめる(脱出の合図を示し合わせ申せましょう)」

乳母のいざときことなども語る(乳母が不穏な動きを警戒していて、察知されたらとても姫を連れ出し申せない事情なども侍従は話し聞かせます)。大夫(時方大夫は)、



「おはします道のおぼろけならず(此処にいらっしゃる山道も大変で)、あながちなる御けしきに(無理を押ししていらっしゃる宮様に)、あへなく聞こえさせむなむ(御対面の適わずと申し上げるのでは)、\*たいだいしき(私の役が果たせない)。さらば、いざ、たまへ(そういうことなら一緒に参れ)。ともに詳しく聞こえさせたまへ(二人で行って宮に詳しくお話し申し上げてくれ)」といざなふ(と侍従に同行を求めます)。 \*「たいだいし」は古語辞典に「怠怠し」と漢字表記がありくおざりである。不都合である。怠慢である。軽率である。もつてのほか。>と語用例がある。「怠怠」は漢語なのか和語なのか分からないが、此処ではく職務怠慢になる→私からは言えない>という言い方のようだ。

「いとわりなからむ(それは困ります)」

と言ひしろふほどに(と言い合っている内に)、夜もいたく更けゆく(夜はだいぶ更けて行きます)。

[第五段 匂宮、浮舟に逢えず帰京す]

宮は、御馬にてすこし遠く立ちたまへるに(兵部卿は馬上で山荘から少し離れて待っていらっしゃったが)、里びたる声したる犬どもの出で来てののしるも、いと恐ろしく(遠吠えする犬どもが出て来て吠えるのも、とても恐ろしく)、人少なに(供人も少なく)、いとあやしき御ありきなれば(粗末な身なりの御外出なので)、「\*すずろならむものの走り出で来たらむも(山賊でも出て来たら)、いかさまに(どうなることか)」と、さぶらふ限り心をぞ惑はしける(と少数の供人は落ち着きません)。 \*「すずろならむもの」はく関係のない人=事情を知らない地元者>だろうが、「走り出で来」の唐突感はく粗暴な者>を思わせるので、通せばく現地の乱暴者=山賊>と取って置く。

「なほ、とくとく参りなむ(さあ早く参ろう)」

と言ひ騒がして(と時方は急き立てて)、この侍従を率て参る(この侍従を宮の御前に連れて行きます)。髪脇より\*搔い越して(侍従は髪を脇から前に抱え出して)、様体いとをかしき人なり(姿がとても美しい)。馬に乗せむとすれど(時方は侍従を馬に乗せようとしたが)、さらに聞かねば(固く拒むので)、衣の裾をとりて(女の裾を持ち上げながら)、立ち添ひて行く(後ろから追いつて歩きます)。わが沓を履かせて(自分の木沓は女に履かせて)、みづからは、供なる人のあやしき物を履きたり(時方自身は従者の粗末な草鞋を履きました)。 \*「かいこす」は古語辞典にく「搔き越す」の音便。後ろの方に垂れ下がっている髪を、前の方に振りやる。>とある。

参りて(時方は宮の御前に参上して)、「かくなむ(事情をお話ししたく侍従を連れて来ました)」と聞こゆれば(と申し上げると)、語らひたまふべきやうだになれば(馬上では女との話はお出来になれないので)、山賤の垣根のおどろ葎の蔭に(村人の家の垣根に茂ったつる草の一角に)、\*障泥といふものを敷きて降ろしたてまつる(「あふり」という馬具の泥除け布を敷いて兵部卿を下ろし申し上げます)。わが御心地にも(兵部卿御自身も)、「あやしきありさまかな(こんな所に腰を下ろすとは、何ということだ)。かかる道にそこなはれて(こういう恋路にしくじって)、はかばかしくは(帝位になど)、えあるまじき身なめり(とても就けない我が身らしい)」と、思し続けるに(と思ひ遣られなさって)、泣きたまふこと限りなし(お泣きになることと云ったら、この上なく情けない)。 \*「障泥(あふり)」はく鞍(くら)の四方手(しおで)に結び付けて馬の腹の両脇に下げる、泥よ

けの馬具。毛皮または皮革製。のちには装飾化し、晴天にも用いた。しょうでい。>と大辞林にある。馬の腹にあり飾り布のことらしい。

心弱き人は(涙もろい侍従は)、ましていとみじく悲しと見たてまつる(いっそう非常にお気の毒に宮を拝し申し上げます)。いみじき仇を鬼につくりたりとも(仇敵を鬼に持っていて)、おろかに見捨つまじき人の御ありさまなり(その鬼でさえ恨み切れない宮の優雅さです)。ためらひたまひて(宮は泣き止みなさって)、

「ただ一言も聞こえさすまじきか(ただの一言も姫とは話せないものか)。いかなれば(何があって)、今さらにかかるぞ(今さらにこういうことになるのだ)。なほ、人びとの言ひなしたるやうあるべし(やはり女房たちが止めたに違いない)」

とのたまふ(と仰います)。ありさま詳しく聞こえて(侍従は事情を詳しく説明申して)、

「やがて(どうかこのままで)、さし召さむ日を(ご予約の日を)、かねては散るまじきさまに(事前に台無しになさらぬように)、たばからせたまへ(ご自重下さい)。かくかたじけなきことどもを見たてまつりはべれば(こうして有難い直々のご来訪を拝し申したからは)、身を捨てても思うたまへたばかりはべらむ(この身を捨てても姫を連れ出し申し頂くべく取り成し申します)」

と聞こゆ(と申します)。我も人目をいみじく思せば(自分でも人目に付く不都合を強く自覚なさっていたので)、一方に怨みたまはむやうもなし(兵部卿宮は警備が厳しくて秘密裏には会えない事情で、姫を一方向的に責めなされるわけにも行きません)。

夜はいたく更けゆくに(夜は深く更けてゆくが)、このもの咎めする犬の声絶えず(威嚇する犬の声は止まず)、人びと追ひさけなどするに(供人が追っ払っていると)、弓引き鳴らし(不穏な気配を感じてか、警戒して弓を引き鳴らして)、あやしき男どもの声どもして(山荘の荒武者たちの声で)、

「火危ふし(火の用心)」

など言ふも(などと言っているのも)、いと心あわたたしければ(とても落ち着かない気分がするので)、帰りたまふほど(兵部卿はお帰りになるが)、\*言へばさらなり(その無念さは今さら言うまでもありません)。\*「言へばさらなり」は慣用定型句の<今さらに言うまでもない>という言い方で、此处では<その無念さは>あたりが目的語の形式主語になりそうだ。

「いづくにか身をば捨てむと、白雲のかからぬ山も泣く泣くぞ行く (和歌 51-18)

「あんな山 こんな山にも 掛かる雲 (意識 51-18)

\*注に<句宮の独詠歌。「白雲」と「知ら(ぬ)」、「無く」と「泣く」の懸詞。『異本紫明抄』は「いづくとも所定めぬ白雲のかからぬ山はあらじとぞ思ふ」(拾遺集雑恋、一二一七、読人しらず)。『一葉抄』は「いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ」(古今集雑下、九四七、素性)。『源注拾遺』は「白雲のかかる空言する人を山のふもとに寄せてけるかな」(拾遺集雑恋、一二一八、読人しらず)を指摘。>とある。「白雲」に

<白い疑念=濡れ衣>という語用はあるのだろうか。「雲」には<不明瞭さ=閉塞感=憂い>などはありそうだから<疑惑・疑念>くらいまでは言えそうだ。で、「白雲」と「知ら(ぬ)」が掛詞になっているということは、「いづくにか身をば捨てむと白雲の」は<何処で死んでも良いと、塞ぐ気持ちのような>と<何処で身を滅ぼすか知らないが>という筋になる、のだろうか。また、「無く」と「泣く」が掛詞になっているということは、「白雲のかからぬ山も泣く泣くぞ行く」は<雲が掛からない山道も無く泣いて帰る>と<晴れた山でも苦勞して登る>という筋になる、のだろうか。それとも「白雲」に姫を例えて、「白雲のかからぬ山」が<姫に会えない今宵>を意味するのだろうか。しかし、そこら辺を如何貼り合わせてみても、私にはこの歌の面白さは分からない。

さらば(分かった)、はや(もう行け)」

とて、この人を帰したまふ(と言って兵部卿は侍従を山荘へ帰しなさいます)。御けしきなまめかしくあはれに(兵部卿の御姿は優美で印象深く)、夜深き露にしめりたる御香の香うばしきなど(夜深い霧に湿った焚き香の香ばしさは)、たとへむ方なし(例えようもありません)。\*泣く泣くぞ帰り来たる(侍従は泣きながら帰って来ました)。\*「泣く泣く」は注に<主語は侍従。句宮の歌「泣く泣くぞ行く」による修辭。>とある。此処の「泣く泣く」は<無念ながら。苦勞して。>の副詞語用や<「無く」との掛詞>でもなく、単純に<泣きながら>という形容詞語用となっていて、オチが着いた格好だ。だから、此処でやっと「なくなく」と歌詠みした面白さが少し分かるが、それでも上の歌に「泣く泣く」の無念さは感じない。

[第六段 浮舟の今生の思い]

右近は、言ひ切りつるよし言ひみたるに(右近が、今夜の御面会は警備が厳しくて無理だと兵部卿宮へはお断りを、言い切ったと報告しに部屋に来ていたので)、君は(姫君は)、いよいよ思ひ乱るること多くて臥したまへるに(いよいよ大変なことになったと臥していらっしゃったが)、入り来て、ありつるさま語るに(兵部卿宮にお会いして帰って来た侍従も、部屋に入ってきて、姫に事態を説明申すと)、いらへもせねど(姫は応えもしないが)、枕のやうやう浮きぬるを(涙で枕が次第に浮いて来るのを)、かつはいかに見るらむ(二人が如何思ふか)、とつつまし(と気が引けます)。

明朝も(つとめても)、あやしからむまみを思へば(泣き腫らした目元を気にして)、無期に(むごに、ずっと)臥したり(臥していました)。ものはかなげに\*帯などして経読む(起きてからは、弱弱しく掛け帯をして読経をします)。「親に先だちなむ罪失ひたまへ(親に先立つ不孝をお許し下さい)」とのみ思ふ(と祈ります)。\*「帯などして経読む」は注に<掛け帯をして経を読む。読経の作法。>とある。「掛け帯」は<近世、女房装束の裳の大腰の左右に付けた紐。肩を越して前で結ぶ。>と大辞林にある。「風俗博物館」の「日本服飾史、資料、平安時代、院政時代の公家女房晴れの装い」ページに裳の大腰に付けた引腰の画像がある。それを後ろから肩にたすき掛けして前で結ぶ、のだろう、多分。

\*ありし絵を取り出でて見て(姫は以前に宮がお描きになった絵を取り出して見て)、描きたまひし手つき(その時の宮の筆運びや)、顔の匂ひなどの(輝く表情が)、向かひきこえたらむやうにおぼゆれば(つい昨日のここのようにありありと思い出されて)、昨夜(よべ、実際の昨夜は)、一言をだに聞こえずなりにしは(一言すらお話し申せなかったのが)、なほ今ひとへまさりて(今さらにいっそう)、いみじと思ふ(無念に思えます)。「かの、心のどかなるさまにて見む、と行く

未遠かるべきことをのたまひわたる人も、いかが思さむ(あの、新居でゆっくりと暮らそう、と未永く御世話くださるよう仰って来ていた大将も、如何お思いになるだろう)」といとほし(と先立つ決心をした姫は思います)。 \*「ありし絵」は注に<匂宮が描いた男女共寝の絵。>とある。この絵はまだ燃やしていなかったらしい。ところでこの絵は、二月二十日過ぎの船宿遊びの時ではなく、正月末に初めて宮が宇治へ出かけて姫を抱いた時に「いとをかしげなる男女、もろともに添ひ臥したる画を描きたまひて」(二章八段)とあったものことだろう。そして、この三月二十日過ぎの宮の訪問時には、もう会えなかったのだから、共寝をしたのは、たった二回の逢瀬であり、その運命に命を懸けるとは実に劇的だ。が、一度の接遇のために人は生きている、という言い方は一つの真理のような気はする。

憂きさまに言ひなす人も\*あらむこそ(死んだ私を二人の男と通じただらしな女と決め付ける人も居るだろうと)、思ひやり恥づかしけれど(思えば気恥ずかしいが)、 \*「心浅く(宮に走って浅ましく)、けしからず人笑へならむを(不実な女だと笑われるのを)、聞かれたてまつらむよりは(大将殿に聞かれ申すよりは)」など思ひ続けて(と思ひ続けて、姫は詠みます)、 \*「あらむ」の未来推量は姫の死後についての予測文意を示す。 \*「心浅くけしからず」は<不貞>を指すので、姫が宮に走った場合の想定文意を示す。

「嘆きわび身をば捨つとも、亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」(和歌 51-19)

「亡骸も 無ければ全て 水の泡」(意識 51-19)

\*上文の「聞かれたてまつらむよりは」の下に省かれた文なら<身をば捨てむ>のような決意で結ばれそうだが、此処では「捨つとも」と反意が示され、全体で思い迷う辛さが表現されている、ということだろうか。それとも、この「憂き名流さむことをこそ思へ」は<汚名が立つと思えば無念だ>ではなく<入水して汚名を洗い流そうと思う>という決意表明なのだろうか。いや、和歌は洒落心だから、こと自殺に際しての歌詠みでも二重読みの遊び心で<身を儚んで死んでも、後から悪名を立てられると思えば無念なので、亡骸もろとも浮いた噂を流し去る為に入水しよう>という、「なきかげ(死後・亡骸)」の掛詞と「うきな(浮き名・憂き名)」の複意と「ながす(噂が立つ・流し去る)」の複意と「こそ」の強調と「思へ」の已然形仮定意を存分に大振している、と取るのが楽しそうだ。

親もいと恋しく(親もとても恋しく)、例は、ことに思ひ出でぬ\*弟妹の\*醜やかなるも、恋し(普段は特に思い出さない父親違いの同腹妹たちの顔立ちの悪さまでも、恋しい)。宮の上を思ひ出でしこゆるにも(兵部卿宮夫人の対の御方を思い出し申すにも)、すべて今一度ゆかしき人多かり(二条院の女房は皆もう一度会いたい人ばかりです)。 \*「弟妹」は「はらから」と読みがある。だったら、是は平仮名か、漢字表記でも<同腹妹>くらいの方が良いんじゃないだろうか。 \*「醜やか」は「みにくやか」と読みがある。身分が卑しい、ということじゃなくて、顔立ちが悪い、ということらしい。何と云うか、何と云っても、やっぱり見た目は大きい。そういうことだろうか。

人は皆(山荘の女房たちは皆)、おのおの物染めいそぎ(各自衣類の染物をして引越準備に忙しい)、何やかやと言へど(何かと話し合っているが)、耳にも入らず(姫には興味が無いことです)。夜となれば、人に見つけられず、出でて行くべき方を思ひまうけつつ(夜になれば、人目に付かず邸を抜け出す方法を考えては)、寝られぬままに、心地も悪しく(寝られないまま、意気消沈し)、\*皆違ひにたり(姫はすっかり様相が違ってしまいました)。明けたてば(夜が明けると)、川の方

を見やりつつ(宇治川の方に目を遣って)、\*羊の歩みよりもほどなき心地す(屠殺場に向かう羊の歩みより死に近い気がします)。 \*「皆違ひにたり」は注にくすっかり人が変わってしまった。>とある。定型句だろうか。是だけでは意味が取り難い言い方だ。「違ふ」は「たがふ」でく変わる。変になる。>という語用があるらしい。因みに、「ちがふ」はく別にする。間違ふ。>という語感らしい。ただ、現代語の「ちがう」はく変だ>という意味はある。 \*「羊の歩み」は注にく明融臨模本、朱合点。『源氏積』は「けふもまた午の貝こそ吹きつなれ羊の歩み近づきぬらむ」(千載集雑下、一一九七、赤染衛門)、また「是寿命(中略)囚の市に趣きて歩歩死に近づくが如く、牛羊を牽いて屠所に詣るが如し」(涅槃經三十八)を指摘。>とある。「午の貝(うまのかひ)」はく午の刻(正午)を知らせるために吹く法螺(ほら)貝。>と大辞林にある。「羊の歩み(ひつじのあゆみ)」はく屠所(としょ)に近づくひつじの歩みの意。死の次第に近づくこと。>とこ語辞典にある。また、「屠所の羊の歩み」はく屠所に引かれていく羊のように、力ないのろのろした歩み。刻々と死期が迫ることのたとえ。屠所の歩み。>と大辞林にあり、この言い方の典拠がく涅槃經三十八>にある經典、ということらしい。が、涅槃經の教義が何なのか、そも涅槃經とは何なのか、が容易に分かるウェブサイトは見つからない。また、深入りする気も無く、とにかく此処の文意はく死に近い>ということ流す。

### [第七段 京から母の手紙が届く]

宮は(兵部卿宮は)、いみじきことどもをのたまへり(会えなかった無念さを非常に嘆く御手紙を遣しなさいました)。今さらに(今となっては)、人や見むと思へば(自分の死後に誰が見るか知れないと思えば)、この御返り事をだに(この御返事さえ)、思ふままにも書かず(姫は素直な気持を書きません)。

「からをだに憂き世の中にとどめずは、いづこをはかと君も恨みむ」(和歌 51-20)

「亡骸も 無い死は誰も 気付かない」(意識 51-20)

\*注にく浮舟の匂宮への返歌。『異本紫明抄』は「今日過ぎば死なましものを夢にてもいづこをはかと君がとはまし」(後撰集恋二、六四〇、中将更衣)を指摘。>とある。引き歌をなぞった「いづこをはかと」の「はか」はく(どこ)がその場所なのか(わからない)>とく(どこを)墓標・成果標(にすれば良いのか)>という二つの筋を表わす語、とのように「千人万首」サイトの「醍醐天皇」ページに説明があった。そのページでは、醍醐天皇と中将更衣との贈答歌の形で紹介掲載されていて妙に臨場感があって面白く、冒頭の醍醐天皇の概説に平安期の中心を見るような感慨も覚えたが、話は当歌に戻す。と、是がく匂宮への返歌>とあるのは、手紙に贈歌があって、それは示されていないが、その贈歌に対する返歌、ということなのだろうか。だとすると、贈歌が示されていないのだから、返歌としての趣きは調べようが無い、ということになる。別にそれならそれでも良いのだが、もし先の「いづくにか身をば捨てむと白雲のかからぬ山も泣く泣くぞ行く」(和歌 51-18)に対する返歌と見ても良いのなら、「はか」のくその場所>は「いづくにか身をば捨てむ」に答えていることになって、それはく宮の死に場所=後追ひ>ということにもなりそうだ。が、そういう真偽の定まらない話題より分かり易いのは、「からをだに憂き世の中にとどめず」は前の独詠歌「嘆きわび身をば捨つとも亡き影に憂き名流さむことをこそ思へ」(和歌 51-19)に対応した言い方になっていて、「亡き影に憂き名流さむ(亡骸と共に浮名を流し去る)」=「からをだに憂き世の中にとどめず(亡骸さえ浮世に残さない)」が成立するので、独詠歌を二重詠みに読むのが正解だと作者自らが答え合わせをしているような遊戯気分の作文に見える。が、それは私が苦勞して読んでいるからそう見えるのであって、当時の読者と作者にしてみれば二重読みな

どの技巧は特に取り上げるに値しない和歌の常識で、その上で、そういう貴族の教養を持つ女が死に直面する切実さこそを、この作文で味わっていたのかも知れない。

とのみ書いて出だしつ(とだけ書いて御返事しました)。

「かの殿にも(大将殿にも)、今はのけしき見せたてまつらまほしけれど(辞世の句をお見せ申したいが)、所々に書きおきて(両方に書き残して)、離れぬ御仲なれば(宮と大将は近い御間柄なので)、つひに聞きあはせたまはむこと(後で突き合わせなさることにもなれば)、いと憂かるべし(如何にも色に迷って死んだ女のように、はしたない)。すべて、いかになりけむと(本当のところは如何だったのか)、誰れにもおぼつかなくてやみなむ(誰にも分からないようにして逝こう)」と思ひ返す(と姫は思い直します)。

京より、母の御文持て来たり(京から母君の御手紙を使者が持って来ました)。

「寝ぬる夜の夢に(昨夜の夢見で)、いと騒がしくて見えたまひつれば(御病状が急変したようにあなたが現れなされたので)、誦経所々せさせなどしはべるを(平癒祈願を幾つかの寺にさせたりしましたが)、やがて、その夢の後、寝られざりつるけにや(そのまま、その夢の後で、寝られなかった所為か)、ただ今、昼寝してはべる夢に(たった今、昼寝して見た夢に)、人の忌むといふことなむ(世間で不吉という事が)、見えたまひつれば(出て来ましたので)、驚きながらたてまつる(驚いてこの手紙を出しました)。よく慎ませたまへ(くれぐれも御安静に為さいね)。

人離れたる御住まひにて(あなたは寂しい山荘住まいでいらっしゃるので)、時々立ち寄せたまふ人の御ゆかりもいと恐ろしく(時々お見えになる大将殿の御正室の妬みも障るかといどく案じられ)、悩ましげにもものせさせたまふ折しも(あなたのお加減が悪いというこの時に)、夢のかかるを(こうした夢見があるのを)、よろづになむ思うたまふる(いろいろと心配に存じます)。

参り来まほしきを(其方へ参上申したいのですが)、少将の方の(少将夫人の御義妹が)、なほ、いと心もとなげに(やはりとても心細げに)、もののけだちて悩みはべれば(産気づいて苦しんでおりますので)、片時も立ち去ること(片時も離れてはならない)、といみじく言はれはべりてなむ(と守殿からきつく言われて居るのです)。その近き寺にも御誦経せさせたまへ(其方の近い寺にも祈祷させなさい)」

とて(と書かれていて)、その料の物(その寺への布施や)、文など書き添へて(依頼状なども書き添えて)、持て来たり(遣して来ました)。限りと思ふ命のほどを知らで(覚悟を決めた残り少ない命とも知らずに)、かく言ひ続けたまへるも(娘を案じてこう言い続けなさる親心も)、いと悲しと思ふ(本当に有難いと姫は思います)。

[第八段 浮舟、母への告別の和歌を詠み残す]

寺へ人遣りたるほど(寺へその遣いに向かわせている間に)、返り事書く(姫は母君への返事を書きます)。言はまほしきこと多かれど(言いたいことは多かったが)、つつましくて(詳しい事情はとても言えず)、ただ(ただこう書きます)、

「後にまたあひ見むことを思はなむ、この世の夢に心惑はで」(和歌 51-21)

「会いましょう この世の夢の 後にまた」(意識 51-21)

\*注に<浮舟の母への返歌。来世での再会をいう。「この世」の「この」には「子の」の意を響かす。>とある。こういう文面のような文句も七語調子だと情緒が出る。しかし、いくら「子の世の夢」と言ってみても、「この世」と「後に」の取り合わせを、不吉を案じた母が不吉に思わぬはずもない。だから、この洒落心が生きるのは、死後に読んでこそだ、という悲しさだ。

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを(そして姫は、読経の鐘の音が風に乗って聞こえてくるのを)、つくづくと聞き臥したまふ(しみじみと聞いて臥していらっしやいます)。

「鐘の音の絶ゆる響きに音を添へて、わが世尽きぬと君に伝へよ」(和歌 51-22)

「この鐘は 私を川に 送る音」(意識 51-22)

\*「鐘の音の」は「かねのおとの」と読みがある。「音を添へて」は「ねをそへて」だ。京都大学本と米国議会図書館アジア部日本課所蔵本の写本画像を参照したところでは、両者共に「かねのをとのたゆるひびきにねをそへて」とあるように見えた。で、「おと」は<「ね」や「こゑ」が聞こえること。>また<たより。うわさ。>と古語辞典にあり、「ね」が音声・音源・音波の発振を言うのに対して、「おと」は音響・聴音・音波の到達を言うようだ。だから、「かねのおとのたゆるひびきに」は<寺の鐘の音が消えて行くのが聞こえるのにつれて>で、「ねをそへて」は<私は泣き声を上げて>で、「わが世尽きぬと君に伝へよ」は<私は死んだとあなたに伝えよう>と読めそう。また、文法解釈からすれば、「鐘の音の絶ゆる響き」「に」に対して、私は「音を添へて」置くから、「わが世尽きぬと」我が母「君に」、「伝へよ」と頼んでいる、と読むべきで、そう読めば「絶ゆる響き」で<死の知らせ>が客観事実として知らさせる絶望感が演出されるのかもしれない。が、私は、いくら洒落心と言っても、此处に至っての自己演出はあまりに冷静で、しかし実は、そういう軽さは妙に生々しく思えたりもするが、それでもやはり此处は、娘が実の母親には、「絶ゆる響き」に制限を知らされて、「音を添へて」死に行く無念を訴えた、と読んで置きたい。いや、無念と言っても恨みではなく、自分の真心にただ共感して欲しいという願い、として。

\*巻数持て来たるに書きつけて(という辞世の句を、遣いが寺から持ち帰った願文経巻に書き付けて)、 \*「巻数(くわんず)」は<僧が願主の依頼で読誦(どくじゅ)した経文・陀羅尼(だらに)などの題目・巻数・度数などを記した文書または目録。木の枝などにつけて願主に送る。神道にもとりいれられ、祈祷師は中臣祓(なかとみのはらえ)を読んだ度数を記し、願主に送った。かんず。>と大辞泉にある。祈祷証書だろうか。

「今宵は、え帰るまじ(今夜はもう遅いので帰れません)」

と言へば(と遣いの者が言うので)、物の枝に結びつけて置きつ(そのまま木の枝に結び付けて置きました)。

乳母(乳母が)、「あやしく、心ばしりのするかな(妙に胸騒ぎがします)。夢も騒がし、とのたまはせたりつ(奥様も夢見が悪いと仰っていましたし)。宿直人(とのゐびと、宿直当番の侍は)、よくさぶらへ(十分警戒するように)」と言はするを(と伝言させているのを)、\*苦しと聞き臥し

たまへり(見張りが多くては抜け出せないと聞いて臥していらっしやいました)。\*「くるし」はく不都合だ>。姫は今夜の内にも入水する心算らしく、見張りが居ては邸を抜け出せない、ということらしい。

「物聞こし召さぬ(何も召し上がらないのは)、いとあやし(いけません)。御湯漬け(お湯漬けだけでも)」

などよろづに言ふを(などと乳母が案じていろいろ言うのを)、「さかしがるめれど(口煩いようだが)、いと醜く老いなりて(本当にずいぶん老け込んで)、我なくは、いづくにかあらむ(私が死んだら、どうするのだろう)」と思ひやりたまふも(と姫は思い遣りなざるにつけても)、いとあはれなり(長きの世話が有難い)。

「世の中にえあり果つまじきさまを(もう生きていられないことを)、ほのめかして言はむ(それとなく知らせよう)」など思すに(とお思いになると)、まづ驚かされて先だつ涙を(別れの悲しみが改めて思い起こされて涙が溢れるのを)、つつみたまひて(隠そうとして)、ものも言はれず(何も言えません)。

右近、ほど近く臥すとて(右近が添い寝するように近づいて)、

「かくのみものを思ほせば(そんなに心配ばかりなさっては)、もの思ふ人の魂は(悩める人の魂は)、あくがるなるものなれば(抜け出すと言いますから)、夢も騒がしきならむかし(奥様の夢見も悪いのでしょうか)。いづ方と思し定まりて(この方に付いて行くとお決めになって)、いかにもいかにも(何があっても)、おはしまさなむ(落ち着いていらっしやることです)」

とうち嘆く(とそっと慰めます)。萎えたる衣を顔におしあてて(姫は気弱そうに夜具を顔に押し当てて)、臥したまへり(伏せていらっしやった)、となむ(どのように見えたのです)。

(2013年12月26日、読了)